

# 国 語

## 注 意

1. 問題は全部で18ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

### マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
---	----------------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり折り曲げたりしないこと。



生まれてくる。自分のあらかじめ用意した論を通すことを第一に考えて席に着き、同様の姿勢をもって臨んでいる相手との間に交わされるやりとりとは、果たしてすべて「深い議論」になり得るのか。「ZADANKAI」こそ、或る固まった前提から出発しているのではないか、という問いである。

手厳しい座談会批判の中にあつて目を引くのは、例外的に少数意見として、「座談会」は、より広汎な文化的過程あるいは政治的過程の一つの延長です。それは政治過程そのものが決定される場所ではない。「座談会」の役割は別の所にある」と発言したテオ・ナジタの言葉である。この中でナジタは「座談会」の役割について、それを裏付けるような具体例を挙げている訳ではない。しかしこの発言を敷衍するならば、日本の座談会には「ZADANKAI」が強調する論争、精度の高い議論によって押し負けない独自の発想がある、ということであろう。

日本の内側から見ても、座談会には十分な評価が与えられているとは言いがたい。現在でも頻度の割に、日本の論壇・文壇では座談会よりも論文・評論の方が上位に位置付けられることが多い。論文と座談を引き比べてみると、はつきりと主張なり、思想性があらわれているのは論文・評論の方である、という前提がそこにある。

或いは特に思想史の資料として座談会の記録を扱おうとした時、どんな判断が下されるであろうか。それをどの文脈で使うかにもよるが、これも恐らく個人の書いた書簡、日記に比して、座談会の記録とは一度本人や編集者の手を経て稿を改めている点で、その座談が行われた状況というものを正確に反映していない、と判定されるだろう。

この見えない一線はどのようにして形成されたのか。それを説明する際、近代の日本における学問・思想の型によって、座談がいささか不幸な境遇を強いられたことを挙げておかねばなるまい。そのことを考えるにあたって、少なくとも、ひとつの画期となったのが岩倉使節団である。

一八七二(明治四)年より足掛け三年にわたつてアメリカ、ヨーロッパを廻り、日本の近代化に資するべく各先進国から制度・技術・文物の摂取にとめた岩倉使節団は、思想面においても、その後の日本の方向性を大きく規定した。使節団の方針となる「事由書」に「欧亜諸州、開化最盛ノ国体・諸法律・諸規則等、実務ニ処シテ妨ゲナキヲ親見シ、其公法然ルベキ方法ヲ採リ、之

ヲ我國民ニ施設スル方略ヲ目的」とある通り、そこで基本となったのは、法制・軍制・学制など、近代国家に見合う諸制度について模範となる国をまず見定め、その中から具体的に準拠すべき理論を見極める作業だった。周知の通り、憲法構想という国制の根幹に関わる作業は、その後、いくつかの曲折を経て、その照準をプロイセン・ドイツへと合わせて行くことになるが、その過程の中でほぼ一貫して変らなかつたのは、準拠モデルに多少の変更があろうとも、その典拠とする素材から思想的エッセンスを抽出し、それを日本の国情に当てはめて行く姿勢である。

もともと、漢訳仏典の言葉をヨーロッパの学術用語に対応させて説明しようとした西周<sup>にしゅうまほ</sup>、中国語訳の『万国公法』を参照しながらフランス刑法の翻訳を試みた箕作麟祥<sup>みつくりんしょう</sup>にみられるように、こうした営みには先例があつた。それらの苦心は確かに、典拠となる思想理解を迅速かつ明快にした。その一方で、この姿勢が常態化し、次第に特化されていく場合、ヨーロッパの学術用語をひとつひとつ日本の言葉に置き換えていけば、学問の充実につながる、と考える傾向が生まれることとなる。その意味で岩倉使節団は近代日本の思考形式のひとつの型を作つたといえる。

ここで問題となるのは、そもそもその元となるヨーロッパの学術用語とは、その土壤となつていく文体、さらにはその背後にあるそれぞれの地域の生活から派生していることである。そのことを理解せずに、性急に用語の置き換えを行い、法制、教育制度などの諸制度を整備する場合、実務上の即効性とは別に、明らかに思想上の欠落が生まれる。現在でもみられる光景だが、たとえば、「帝国主義」という言葉をめぐつて議論が交わされる時、それはヒルファーディング<sup>\*</sup>の言葉か、それともレーニン<sup>\*</sup>の言葉か、という点に強い関心が注がれ、話自体はそれ以上の展開がみられないまま、しかもそれが学問であると看做<sup>ま</sup>されてしまうことがしばしば起こる。この現象は、明らかに明治期の学術用語をめぐる営みから生まれた名残りである。

一八九一年九月、陸羯南<sup>\*くがつな</sup>は『近時政論考』においてこの二〇数年程の間に日本の論壇に起こつた風潮を紹介している。羯南はまず、政治思想によつて論を立てて人を感化する者を「政論派」、政治思想を行動によつて示し社会を変えようとする者を「政党派」と呼び、後者に値するものがいまだ日本に現れていないことを指摘する。その要因として羯南は、明治維新以降、西洋の思想書から安易に文章の一部を引き、学術用語を移植し、それによつて自らの政治思想を塗り固める習癖が知識人に巢食<sup>すく</sup>つていること

を挙げる。

西人の説を聞き、西人の書を読み、此処より一の片句を竊<sup>ちす</sup>み、彼処より一の断編を剽<sup>け</sup>り、以て其の政論を組成せんと試む、是に於て首尾の貫通を失ひ、左右の支吾<sup>\*</sup>を来し、到底一の論派たる価値あらず、斯<sup>か</sup>の如きもの往々其の例を見る。然りと雖<sup>いへど</sup>も是れ近時の政界に免るべからず、吾輩は略<sup>ぼ</sup>その事情を知れり、維新以来僅<sup>わずか</sup>に二十有三年、文化の進行は大長歩を以てしたりと曰ふと雖<sup>も</sup>、深奥<sup>9</sup>の学理は豈<sup>あ</sup>に容易に人心に入るべけんや(『陸羯南全集』第一卷)

開かれたナシヨナリストである羯南から見ても、言葉とは本来、その言葉が生まれた環境と切り離しては十分その効用を果たすことはできないと映つたであろう。それは生まれてくる場所が日本でも西洋でも変わりはない。言葉の背後にある文化的蓄積を吟味することを抜きにして性急に或る政治思想を實踐に移そうとしても、恐らくは破綻することを免れない。

論を立てる時、ひとつひとつの言葉の来歴と意味を明示することは、訓詁学に代表される在来の学問においてひとつの重要な支柱であつたし、決して新しいものではない。しかし、ピンポイントされた學術用語に依りかかつたまま論を進めることは、ともすれば既存の思想から適切な言葉を引いているか、という点に判断基準が置かれがちになり、眼前の状況に対する洞察が見失われてしまう。羯南の危惧はまさに、この傾向が常態化しつつある中から発せられたといえる。

「一の片句」という羯南の表現に代表されるように、近代日本の知識人は言葉を直接的にピンポイントして捉えることが西洋の学問を通して身に付いてしまった。しかし、もともと言葉とはピンポイントされる前に、その内部に独特のふくらみや情緒、そしてそれらを含んだ曖昧さを持つものである。具体的に或る言葉が「片句」<sup>10</sup>によって、規定されてしまうと、それは明晰なように見えて、これら多くのものが抜け落ちることになる。これらのものを抜きにしては座談のような複数の人物によって構成される言葉の往還は、その魅力を失つてしまう。まさに座談の前には、大きな壁が立ちはだかつていた。

(鶴見太郎『座談の思想』より)

(注)

\*ヒルファアーディングⅡ(1877年～1941年)ドイツの医者・経済学者・政治家

\*レーニンⅡ(1870年～1924年)ロシアの革命家

\*陸羯南Ⅱ(1857年～1907年)明治中期のジャーナリスト・政論家

\*支吾Ⅱ行き違い

問一 傍線部1「座談の思想を考える重要な論点」として「ZADANKAI」で指摘されたことがらと合致しないものを次の①～

⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 1。

① 首尾一貫しよく考え抜かれた議論が成り立たない。

② はじめから合意を前提としていて意見の衝突を避けている。

③ 論争化しそうな問題を回避する暗黙の了解がある。

④ 「深い議論」とは論争によって代表されるものではない。

⑤ 緊張感のある論争が生まれる可能性が乏しい。

問二 傍線部2の読みとして正しいものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2。

① こうはん

② こうほん

③ こうぼん

④ こうへん

⑤ こうばん

問三 傍線部3「座談会」の役割は別の所にある」とすれば、それはどのような特徴においてか。説明として最適なものを、次の

①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **3**。

- ① 座談会においては主題となる言葉の吟味を慎重に行いながら、議論をていねいに展開するという特徴において。
- ② 座談会の記録は一度本人が確認したものが編集されるのだから、資料として一級であるという特徴において。
- ③ 座談会の言葉にはヨーロッパの学術用語を正確に翻訳したあとの、文化的信頼性があるという特徴において。
- ④ 座談会は過激な政治行動によらず、相互の理解を以心伝心によつて穏やかに成立させるといふ特徴において。
- ⑤ 座談会では論が焦点化される以前の、独特のふくらみや情緒や曖昧さをもつ言葉が用いられるといふ特徴において。

問四 傍線部4の読みとして正しいものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **4**。

- ① せん
- ② ふこう
- ③ せこう
- ④ ふえん
- ⑤ しこう

問五 傍線部5「日本の論壇・文壇では座談会よりも論文・評論の方が上位に位置付けられることが多い」とあるが、その理由として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **5**。

- ① 座談会に比べ論文や評論の方が明確に主張や思想があらわれているから。
- ② 論文や評論は個人の意見だが座談会は複数の発言に割れているから。
- ③ 座談会はその場の雰囲気の影響されるが論文や評論は純粋な思考だから。
- ④ 論文や評論は推敲が重ねられているが座談会には本人の確認がないから。
- ⑤ 論文や評論は多数意見に散漫化するが座談会是一个の結論に焦点化するから。

問六 傍線部6「座談がいささか不幸な境遇を強いられた」とはどういうことか。説明として最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6。

① 単語レベルで準拠する学問を理解しようとした日本の近代化は迅速さを重んじたため、漢訳仏典にこだわる座談は置き去りにされてしまったということ。

② 近代日本の学問・思想には文化的蓄積を軽視した「片句」で成り立つ型があり、言葉の背景や文脈をふまえた座談は曖昧なものに見なされたということ。

③ ヨーロッパの学問や思想は国制の根幹に関わるものとして明治政府に優遇されたが、座談は日本の思考形態であったため注目されなかったということ。

④ 西洋思想の片句を早急に取り入れた「政論派」は明治維新に活躍したが、座談によって人心を掌握しようとした「政党派」は出遅れてしまったということ。

⑤ 「一の片句」の置き換えで新たな学問・思想をとらえようとした時代にあつて、在来の訓詁学に基づいた座談は古いやり方だと思われたということ。



問七 傍線部7「岩倉使節団」が近代日本の思考形式に与えた影響はどのようなものか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7。

① 言語を異にする学問・思想であつても言語体系そのものにさかのほる必要はなく、漢訳仏典を利用すれば当座の知識は得られると実証した。

② 準拠するモデルは二義的な問題で、近代国家成立の根幹となる思想・制度を迅速かつ正確に取り入れるべしという大義を学問にあたえた。

③ 学問・思想にはその国の文化や歴史が蓄積されており、一片句といえどもそうした背景を考慮しなければならないという姿勢を示した。

④ 典拠とするヨーロッパの思想からエッセンスを抽出し、その學術用語を逐語訳的に日本語に置き換えれば学問が成立するという考え方を導いた。

⑤ まず目的とするところに準拠した理論を見極め、実務に適する学問から理解するよう近代の学問移植の手順を具体的に展開して見せた。

問八 傍線部8「それが学問であると看做みされてしまう」とあるが、その原因はそもそもどこにあるのか。理由として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8。

① 歴史的に新しい言葉には意図的な文脈の改変が行われやすいから。

② 漢訳仏典の宗教用語は「帝国主義」という思想用語となじまないから。

③ 学者は論理の展開よりも用語の定義の方を重視するものだから。

④ 具体的な言葉に比べ抽象的な用語は意味の振れ幅が大きいものだから。

⑤ 「帝国主義」という用語が言葉の置き換えレベルで定着してしまつたから。

問九 傍線部9で陸羯南が「深奥の学理は豈に容易に人心に入るべけんや」と考える理由として、ふさわしくない文中の語句を次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **9**。

- ① 一の片句を竊み
- ② 一の断編を剽り
- ③ 首尾の貫通を失ひ
- ④ 左右の支吾を来し
- ⑤ その事情を知れり

問十 傍線部10「片句」と意味的に合致する最適な語句を、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **10**。

- ① ピンポイント
- ② 来歴
- ③ 文脈
- ④ 曖昧さ
- ⑤ 文化的蓄積

問十一 本文章の内容と合致しないものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **11**。

- ① ヨーロッパの学術用語の性急な置き換えは実務上の即効性はあつたが、その言葉の背景を切り捨てたため思想上の欠落をもたらすことになった。

② 「ZADANKAI」は論争を回避するという座談会の暗黙の合意を批判したが、この企画自体がすでにある固まった前提から出発してはいないか。

③ 日本の学問・思想はモデルとすべき先進国の文化的典拠から「一片句」を切り取っただけで、その核心を首尾一貫したものとして理解していない。

④ 言葉のピンポイント化は学問を迅速に摂取するために不可欠な手段であり、必ずしも座談における言葉の往還という魅力をそこなうものではない。

⑤ 漢訳仏典の言葉をヨーロッパの学術用語に対応させるやり方が常態化し特化したため、これがそのまま学問の充実につながると思われるようになった。

二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

サンリテグジュペリが「<sup>1</sup>ぼくの心のなかにはいつもこんな少年がいるのさ」と言つてその子どもを主人公に『星の王子さま』を著したように、原<sup>1</sup>民喜の内にも小さな子どもが宿つていた。その子どもは、戦前から「幼年画」や「死と夢」としてまとめられた一連の作品に描かれ、さらに晩年、童話へと昇華した。民喜は絶筆となつた小説「心願の国」のなかで「僕は一人の薄弱で敏感すぎる比類のない子供を書いてみたかった。一ふきの風でへし折られてしまふ細い神経のなかには、かへつて、みごとな宇宙が潜んでゐさうにおもへる」と書いている。その子ども像こそ、民喜が描き継いだ子どもであり、自身の魂の姿であつたらう。両者が抱いた内なる子どもは、単に子ども時代の自身ではない。それは、おとなになつても変わらず、内に抱きつづけている、善悪を超えた、無垢な、人間の核たるところのものである。

ところで、民喜を写した代表的な写真で、大きな石の前に立つ肖像写真は、原爆体験以後、小説「鎮魂歌」が発表された雑誌『群像』一九四九年八月号の口絵として撮影されたものである。カフカのまなざしも思わせるその姿は、民喜の文学のように張りつめ、透明感を湛えている。民喜の中学時代からの友人で北海道札幌市に住んでいた長光太は、その掲載誌を民喜から送られ、「墓石ノ材料ニモタレテイタノデ、ドウデモヤルツモリカト思ツタ」という。そして同年十月、光太は、民喜からその年いっぱい『群像』で『三田文学』の編集を辞すことが内定したとの手紙を受け取り、「今後一年間は何とかして生きのびたいものだと思つてゐる」とも記されていたことから、これは自殺すると感じ、その後、さまざまに手紙を書き送るなかで童話をすすめ、恋でもすれば道がひらけると励まし、『婦人朝日』の知人を紹介するなどしたという。民喜は、若い頃、結婚前に同居していた光太の部屋でカルモチン自殺を図つたことがあつたため、光太は民喜の切実さを理解していた。民喜の童話は、何としても民喜に  
A

一九四九年末、民喜は、『三田文学』の編集を若い世代と交替すると、翌年一月に『三田文学』編集室も兼ねていた神保町の能楽書林から吉祥寺の下宿へ転居し、静かな環境で執筆に集中していった。民喜が童話を執筆し始めた時期は、同年二月に兄の原信

嗣宛ての書簡で「美樹君にはおめでたとの由、私も近頃童話を書きはじめてみますが、美樹君たちの息子や娘がそれを読んでくれる日もあるだらうと思つてゐます」と記していることから、吉祥寺へ移つて間もなくの頃と推測される。

詩稿「ペンギン鳥の歌」は、生前未発表の作で、『近代文学』一九五一年八月号に「遺作詩選」として「屋根の上」「蟻」「海」とともに掲載され、年譜にも題名が記載されていたが、作品自体はこれまで全集等にも収録されていなかったものである。なぜこの愛らしい作品が全集から落ちたのかは不明である。歌を含む子ども向けの詩稿は、原民喜作品ではこの詩稿の他に無い。私は初出を確認して初めてこの詩に接し、大変驚き、題名の上に付けられていた一羽のペンギンの挿絵に見入つて思わず撫でてしまった。ペンギン鳥の歌とはどんな旋律なのだろう。民喜は歌つていたはずである。民喜も愛読していた宮澤賢治童話の雰囲気も偲ばれる。言葉の響き、詩のもつリズムから、その歌を聴きたい。

私は、こうした「ペンギン鳥の歌」や童話作品を読むと、民喜が晩年に親しくし、作品に「U」として登場する祖田祐子に宛てた遺書の一節を想い出す。「あなたを祝福する心で一杯のまま お別れ致します」<sup>2</sup>。これらの作品も、この世界の芯を美しく見つめて祝福する心一杯で書かれたものだろう。

民喜と光太の関係を追っていると篤い友情に打たれ、人生において親友の在る幸いをおもう。また同時に、友とは、同時代を生きる同士であつて、別の人生を歩んでいかなければならない厳しさもおもう。<sup>3</sup>

民喜にとつての光太は、『群像』一九五〇年一月号に発表された小説「火の子供」にもっとも表されている。光太をモデルとして描いた友について、「その友に惹きつけられてゐたのは、やはり彼のなかにある人並はづれて B 人間の姿だったのかもしれない」といい、その友が出かけた北海道で愛人を得て戻らず、困窮した生活から頻繁に手紙を送つてくるようになること、<sup>4</sup>「この友がこの地上で受けた一切の傷がこの地上で癒やされることを祈つてゐた」と綴っている。実際、二人の間で交わされた書簡は、民喜から光太宛てが六四通、光太から民喜宛ては戦前分も含めて一五一通が残されており、特に光太が北海道へ移つた一九四七年以降が多く、光太は三日連続して民喜に送付しているときもある。

そうして、二人は戦後の厳しい時代とともに生きていくなかで、民喜は、一九四八年三月に、光太の詩集『登高』のために「跋」

を執筆している。ただ、この詩集は、光太自身の推敲が終わらず、当時は出版を断念し、長光太資料の寄贈を受けた北海道文学館より二〇〇七年に発行された。民喜は「跋」の末部で「これは光太が詩を書きはじめてから、二十七年目にはじめて上木される詩集である。思へば一九二三年(大正十二年)光太がはじめて私のところに訪ねて来た夜の顔もまだ私の眼底にはかなりはつきり残つてゐるが、その幼ない光太の顔と、今は札幌にゐる私には見えないが想像はできる長光太の顔と、その二つの顔の谷間に、この詩集が置かれるとき、<sup>4</sup>わつと泣き崩れたくなるのはひとり私ばかりであらうか」と記している。中学時代から詩作をともにし、長年の光太の労苦をわかつていた民喜の感情は、ここで破裂している。

このように、大人になって幼い日の姿を思つて嘆く心情は、民喜は同年七月に『三田文学』に発表したエッセイ「愛について」においても表している。そこでは、少年時代に姉から聞かされた話として、ある画家が王様から天使の姿を描くよう命じられて、公園にいた子どもをモデルに描き、歳月を経て、今度は悪魔の絵を依頼され、牢獄にいた囚人をモデルに描き、その囚人に天使の絵を見せると、「この絵は私なのだ」と言つて嗚咽おぼえしたという物語を紹介し、自分もその囚人のように泣きたくなることがあるといひ、「美しい姉は私に泣けと云つてゐるのではない。いつもその顔は、私を泣くところから起ちあがらせるしなやかな力なのである」といつて結ばれる。「美しい姉」とは、少年時代、民喜に聖書を伝えたツルである。この姉から向けられたまなざし<sup>5</sup>が、民喜にとつての「愛」であつた。民喜は同作で「私には姉がその弟の全生涯にまで影響するやうな微妙な魂の瞬間を把とらへたことがおそろしくてならない」とも記している。姉のまなざしは、自分では囚人<sup>6</sup>のようだとも思える民喜の奥に、天使のような無垢な子どもの姿があることを認め、その聖性に信頼して注がれていた。民喜は、生涯、姉からのまなざしの内に生き、民喜の内なる子どもは、姉のまなざしのなかで息づいた子どもであつたのだろう。

そう考えるとき、光太の詩集のために「跋」を書きながら、民喜が見つめていた幼い光太の顔は、単に子ども時代の姿ではなく、無垢な、聖性を宿した光太の姿であつたのではないか。また、その尊い存在が、苦しみを背負つてきた歳月を想ひ、無垢な子どもの姿の光太が守られるよう、「子どもだつたころの長光太に」対して、祈りは捧げられていたのではないだろうか。

民喜の義弟で評論家佐々木基一は、民喜の童話について「晩年の、ただ死をみつめて生きていた頃の、剃刀かみばしのように純粹にな

りきつた心情がそのまま文字に移されたみたいで、触れば手が切れそうである。わたしは、サン・テグジュペリの童話『星の王子さま』をこよなく愛するが、原民喜の童話は、小篇ながら質においてサン・テグジュペリの作品に優に匹敵するだろうと思う」と評している。民喜も、サン・テグジュペリも、自らの死を見据えるなかで童話にむかった。

サン・テグジュペリは『星の王子さま』を書き上げると、一九四三年四月、ナチス・ドイツの支配下にあった故国フランスの解放を願って戦線へ復帰すべく、亡命先のニューヨークから北アフリカに向けて出発した。その際、妻コンスエロに宛てて決断の深意を次のように伝えている。

ぼくは戦争に出発するのだ。ぼくには飢えている者たちから遠く離れていることが耐えられない。ぼくの良心と折り合いをつける方法はひとつしか知らない。それはできるかぎり苦しむことだ。できるかぎり多くの苦しみを探し求めることだ。

(中略)僕は死ぬために出発するのではない。苦しむため、そうやって同胞と通じ合うために出発するのだ(……)。ぼくは殺されることはぞんではないが、そんなふうにして眠りに入ることはよるこんで受け入れる。

すでに四〇歳を越えていたサン・テグジュペリの、無謀とも思われる戦線復帰には、母国の同胞を救うという義だけでなく、苦しむ人々と共に苦しまなければ自身が耐えられないという内的必然性があったのである。そして、それは自らの死によってしか贖あがなられないものであったといえよう。

このように、他者の苦しみを命懸けで自らのものとしてゆく「共苦」の道は、民喜にも共通していた。民喜は小説「鎮魂歌」のなかで、「自分のために生きるな、死んだ人たちの嘆きのためにだけ生きよ」と言い聞かせながら、「救ひはないのか」と自問し、「僕にはまだ嘆きがある」「嘆きよ、僕をつらぬけ」といって、死者の嘆きにつらぬかれて生きる道を発見していった。しかし、そのことで逆に、死者との一体感を強め、やがてそちら側の世界へ重心を移していく。

両者は「共苦」の道を歩むなかで、C を棄てた。そうして人生は死へ向かって下降しながら、しかし、魂は反転して天を志向して上昇をはじめ、人間存在は上下に引っ張られて緊張し、存在の深みにあるものが結晶して外へ弾き出されていった。そのようにして生み出されたのが、民喜の童話であり、サン・テグジュペリの『星の王子さま』なのである。

人は(共苦)する存在だ。わたしは、私の内にも住んでいる小さな子どもに感じながら、近くの、また、遠く離れている友と、同じときを共に生きていきたい。

(竹原陽子「原民喜童話と『星の王子さま』」による)

(注)

\*原民喜 詩人、小説家(一九〇五～一九五二)。広島県出身。原子爆弾投下で被災、戦後に自ら命を絶った。

\*上木 出版。

問一 傍線部「原民喜の内にも小さな子どもが宿っていた」とあるが、筆者の言う「小さな子ども」とは何か。その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 12。

- ① 人間の中心にある純真さ
- ② 子ども時代に特有な純粋さ
- ③ 原初的な自然への恐れ
- ④ 庇護を必要とするひ弱さ
- ⑤ 子どもらしい無邪気さ

問二 空欄 A に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 13。

- ① 子どもの頃に戻ってほしい
- ② 成功してほしい
- ③ 生き延びてほしい
- ④ 友人のままできてほしい
- ⑤ 道を変えてほしい

問三 傍線部2「これらの作品も、この世界の芯を美しく見つけて祝福する心一杯で書かれたものだろう」という筆者の見解についての説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **14**。

- ① 筆者は民喜の童話を、世界が美しく調和していることへの喜びを、万感を込めて書いたものと見ている。
- ② 筆者は民喜の童話を、世界の片隅でけなげに生きる子どもたちを、勇気づけるために書いたものと見ている。
- ③ 筆者は民喜の童話を、世界の核心に汚れないものがあるという幸いを、喜び称えて書いたものと見ている。
- ④ 筆者は民喜の童話を、運命に翻弄される子どもの悲しみを、やさしいまなざしで見つめて書いたものと見ている。
- ⑤ 筆者は民喜の童話を、世界の中核には美しい法則があるという事実を、心から讚美して書いたものと見ている。

問四 傍線部3「別の人生を歩んでいかなければならない厳しさ」の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **15**。

- ① 親友であっても、それぞれが築いた人間関係を守るために、敵対することもあるという事実の悲しさ。
- ② 親友であっても、決して互いに理解できず、各々の人生を生きなければならぬという現実の苦しさ。
- ③ 親友であっても、社会的地位に差がつくにつれて、言葉を交わすこともなくなるという現実の無情さ。
- ④ 親友であっても、それぞれの苦難に満ちた人生を、自分自身で生きねばならないという事実の冷厳さ。
- ⑤ 親友であっても、運命のいたずらによって正反対の人生を生きることになるといふ事実の受け入れ難さ。

問五 空欄 **B** に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **16**。

- ① 感情豊かな
- ② 献身的な
- ③ 心安い
- ④ 優れた
- ⑤ 悲しい

問六 傍線部4「わっと泣き崩れなくなるのはひとり私ばかりであらうか」という民喜の心情を筆者はどのように理解したか。それを最も明確に示した一文を本文から抜き出し、その最初の七字を記せ(句読点を含む)。解答用紙(その2)を使用。



問七 傍線部5「この絵は私なのだ」と言つて嗚咽した」のはなぜか。その説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 17。

- ① 自分の罪深さに気づき、純真な自分に戻れないことに絶望したから。
- ② 自分の奥に天使のような純真さがあつたことに気づいたから。
- ③ 幼い自分をモデルにして天使を描かせた王様の慈悲に感動したから。
- ④ 画家が幼い頃の自分をモデルにしていた偶然に驚いたから。
- ⑤ 苦しみの歳月を生きた自分を描き続けた画家に心から感謝したから。

問八 傍線部6「民喜は、生涯、姉からのまなざしの内に生き、…(中略)…子どもであつたのだろう」の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 18。

- ① 姉が民喜の内に子どものような純粋さを認めたことによつて、民喜はそうあり続けることができたということ。
- ② 姉が民喜の奥に無垢な清らかさを見たことで、民喜はそうあり続けようと演技をしたということ。
- ③ 姉のみが民喜の理解者であり、民喜は姉の目の届くところで、その庇護を受けて生涯を送つたということ。
- ④ 民喜にとつて姉は母のような存在であり、姉のもとでは子どものように無邪気に振舞えたということ。
- ⑤ 民喜は、自分の聖性を信頼している姉のみに心を開き、他の人々には決して本心を見せなかつたということ。

問九 傍線部7「同胞と通じ合う」の説明として最適なものを選び、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 19。

- ① 異国で苦しんでいる同胞を救い出すこと。
- ② 母国の同胞と緊密に連繋して戦うこと。
- ③ 異国で同胞と互いの理解を深めること。
- ④ 母国の同胞と同じ苦しみを分かち合うこと。
- ⑤ 異国にいる同胞と重大な情報を共有すること。

問十 傍線部8「しかし、そのことで逆に、死者との一体感を強め、やがてそちら側の世界へ重心を移していく」の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 20。

① 民喜が死者の苦しみを理解しながら生きる道を見出したことで、生者の猥雑な世俗世界への興味を失っていった、という事。

② 民喜が共に苦しむ相手として死者を選ぶという誤った道を選んだため、自ら命を絶つ方向に向かってしまった、という事。

③ 民喜が死者の嘆きを自分の苦しみとして生きる道を見出したことで、死者の世界に近づき、命を絶つ方向に向かった、という事。

④ 民喜が命懸けで死者の嘆きに耳を傾けようとしたことが、病身の民喜を消耗させ、その命を失わせることになった、という事。

⑤ 民喜が死者の苦しみを自分の苦しみとする道を選ぶことで達観し、生と死の区別を忘れるようになっていった、という事。

問十一 空欄

C

に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 21。

- ① この世の利害関係
- ② 自己への執着
- ③ 家族への愛情
- ④ 文学への関心
- ⑤ 他者への怒り

問十二 傍線部9「存在の深みにあるもの」とは、筆者の考えでは何であるか。その説明として最適なもの、次の①～⑤から選  
び、記号をマークせよ。解答欄番号は 22。

- ① 運命を生きる悲しみ
- ② 死への畏れ
- ③ 愛の聖性
- ④ 不変の汚れなさ
- ⑤ 絶対者への信頼

問十三 二重傍線部「篤」の読みを平仮名で記せ。解答用紙(その2)を使用。

